

日を過ぎると、五月の日差しは思いのほかきつ  
い。

バス停の直ぐ前のベンチで、じわじわと照る光  
りを避けるように手をかざして座っている人は、  
皆バスを待っているようだ。腕時計を見ると、  
二時前だ。発車予定時刻まで五、六分ある。  
美沙は何気なく、病室で話題になった喫茶店の  
方へと目を向けると、朝の老女がこつちに向かっ  
て、ゆつくりと歩いて来る。きつと同じバスに乗  
り合わすのだろう。今朝、会っただけの人なのに、  
なぜか不思議な親しみが湧いてきた。  
病院前発のバスがやってきたのと、老女が乗  
り場についたのはどちらが早かったのだろうか。

るようにしてバスに乗った。  
後ろでじつと見詰めていた美沙は、高齢でも人の  
手を借りることもなく、しつかりと自分を示す  
彼女を羨ましいとさえ感じた。  
定刻になり、バスは美沙の住んでいる市役所の方  
に発車した。  
天候の具合だろうか、いや、人の気配だろう。や  
つぱり朝の時と同じようにバスの中は和んでい  
る。コミュニティバスの特徴かも知れない。  
美沙にはすこぶる心地よい。  
早くも住宅街のバス停に到着した。  
老女は童女のような笑顔を残して、朝、乗ってき  
た同じ停留所で降りていった。唇をちよつと

ドアが開き、運転手が降りてきて頭を下げた。  
「お待ちどうぞさまです」

朝の運転手とは違っていたが、中年のいかに  
も仕事慣れた顔だ。

ベンチで待っていた人が乗り、あわてたように  
急ぎ足で駆けつけてきた三人が続き、あとは老女  
と美沙だ。美沙は朝と同じように、  
「どうぞ」

と、老女を前にうながす。

「じゃ、お先に」

小柄で少し丸っぽいと見えた老女の体は、  
意外ときやしやだった。美沙に軽く頭を下げ、  
「よいしょ」の掛け声とともに、大きく伸びあが

上にあげ、ほほを膨らませた親しみのある顔に  
美沙は惹かれた。  
十数年前に死んだ母の面輪と重なったわけでは  
ないが、美沙の胸の中は久しぶりに温もりで満た  
されたような感情が湧きあがり、この人にまた  
会いたいと思つた。

明日も明後日も病院通いはバスにしよう。もし  
たら何かいいことがありそうな気がしてきた。

朝、通つて来た道を逆に走り、バスは公園を過  
ぎ、やがて美沙の降りるバス停に着いた。

「ありがとうございます」

運転手の挨拶と美沙の言葉が重なつた。美沙の  
気持ちは弾んでいた。バスを降りハミングを口ず

さみながら帰宅した。

青い空はまだまだ明るい。

夫が入院して二週間。美沙は夫のいない不便さより一人だけの時間の気楽さに慣れてきている。美沙の日常はいかにもものわかりのいい賢ぶつた人間を装いながら、本当は案外身勝手であまな性分かもしれない。

窓を開け放し、朝出かける前に干した洗濯物を手早く取り込んだ。夫のバジャマも着替えとして病院に持っていくのはわかっていたが、取り敢えず夫の部屋へ、そして小物はそれぞれの引き出しに仕舞った。

いつの間にか傾いた日差しが、夫の部屋に斜めものを見入っている自分に後ろめたさなんて全くない。一枚の写真を見つけるまでは。

まさか。こんなところにこの写真を持っているなんて。隠していたのだ。写真ではなく気持ちを書と妹の玲子が。

夫が密かに名刺入れに隠していた写真には、夫と美沙の死んだ妹が並んで映っていた。

二十年前、競技ダンスの華やかなコスチュームに身を包んで、寄り添うように頬を寄せて笑顔で写っている古いものだった。これを一冊のアルバムの中で見つけたものなら、何のわだかまりもなく懐かしさで見入っていただろう。しかし、名刺入れに大事そうに。

に入り込んで、陽の光りが夫の机を照らしている。西日に誘われるようにその机の前に座った。心身ともに解き放されたような気楽さで夫が読みかけのままひろげている雑誌のページを捲つてみたが、美沙にはあまり興味の無い記事のように思えて直ぐ閉じた。

机の左上に黒い名刺入れがある。定年退職をして肩書のなくなった今、もう自分の名刺は入っていないはずだ。入っているのはきつと仕事関係だった人たちのものだろう。

美沙は何の気なしに黒い革製の名刺入れを手元に取り、中を開け、何枚かの名刺を手にしてみた。美沙にも心当たりの人もいた。納得しながら夫

なぜ。死んでしまった妹とはいえ、二人だけの写真をいつまでもどんな思いで仕舞い込んでいたのだろうか。

美沙ののどかな気持ちが一瞬にして揺らいだ。乱れた。

(夫は妹に恋していたのだろうか。そして、今もまだ忘れないでいるのだろうか)

そんな思いが過ぎる。いや、何でも無い。首を振る。単なる一枚あった写真を入れていただけだろう。そんなはずはない。大切だからこそ、長い間持っていたのだろう。夫の胸のうちには二十年も

妹がいたのだ。

美沙の心は騒いだ。

見てはならないものを見てしまった罪悪感と、秘密を暴いたように心は浮き足立ち、狼狽している。裏切られたという腹立たしさも入り混じる。美沙は心臓の動く音が聞こえるほどの高鳴りを感じ、小刻みに震える手で、今の気持ちをリセットするかのよう、写真を元の名刺入れに仕舞った。

今まで想像さえしてなかった夫と妹は二人だけのどんな繋がりをもっていったのだろうか。その疑問だけが胸の中で大きく膨らんでいく。

青色から少しずつ赤みを帯びた空が、夕方の町

の景色を染め始めたのに、美沙には一切目に入らなかった。

先ほどまでの至福の時はたちまちに萎えてしまった。どこからか猫の甲高い鳴き声が聞こえてきた。いつも聞くその声さえ今の美沙にはわびしく感じられてくるのだった。

美沙は自分たち夫婦が全く円満な理想的な二人だとは思ってはいないが、平凡な普通の暮らしで、それ以下とは感じていなかった。

今までの夫婦の関係に大きな問題もなく、夫に泣かされて苦労した覚えもなかった。恨んだりなじったりするほどのものも思い当たらない。小さ

な日常的な口げんかはあっても、諍いになるほどのものはなかったのに、今になってこんなことが。それも相手は実の妹だ。

日頃の美沙にすれば、考えられないほどの執拗さで、隠し持っていた写真のことだけを思いつめていた。

しかし、美沙の心の中には、死んでしまった妹への嫉妬心といったものが湧いてこないのが不思議だった。それは若くして逝った妹への哀れさからくるものだろうか。

美沙は方程式でも解くような気持ちで、妹が生きていた頃を思い出していた。いくつかの偶然が重なり合って、夫の信行

と美沙は結婚した。そして、夫に妹を近づけたのは、ほかでもない美沙自身だった。

\*

信行は、岡山の大学にはいった頃から、社交ダンスに熱中して、学連大会とか地方の大会では上位に入賞し、ダンス仲間ではかなり名前が知れ渡っていた。今では想像もできないことだ。

背の高い信行がタンゴなどモダンの曲に合わせのキレのいい踊りは恰好がよく、その頃は美沙が信行にあこがれを抱いていた。

美沙もダンスのステップくらいは踏めたが熱中するほどでもなく、競技となるとそれはほど遠いものだった。

社会人になつてからも、結婚しても、なおダンスを続けていた信行は、長くペアーを組んでいた学生時代のパートナーと離れ、新婚の美沙を相手に踊り続けた。

夫は、思うように上達しない美沙にいらだちも覚えただろうが、そんな態度はみじんもみせないで辛抱強く付き合ってくれた。  
美沙もできるだけ夫の熱意に応えようと努力はしたが、上手になるより先に子供を身ごもってしまった。

「ダンスだけは続けたいけどなかなかいい相手がいないよ」

夫のすがるような目に美沙は、

「妹に言つてみようか」

気軽に口にした。

美沙より七歳年下の妹の玲子は、短大を卒業してすぐ地元建設会社の事務員として勤めていたが、美沙の頼みに快く応えてくれた。  
美沙が拍子抜けするくらい簡単だった。

「ああ、いいわよ。私もいつかダンスがしたいと思つていたくらいだからね」

(以上4月23日放送分)